あーるぴぃじぃ

三毛猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あーるぴぃじぃ

【Ｎコード】
Ｎ０８２１ＢＡ

【作者名】
三毛猫

【あらすじ】
コンピュータＲＰＧのようなレベルという概念が、もし現実の世界に存在していたら……？　そんな感じのお話。以前ｔｅｘｐｏにて公開していました。現在ｐｉｘｉｖでも一部公開しています。

耳年増なオンナノコのお話（前書き）

連載小説形式になっていますが、このお話は世界を描くことを目的としているため、基本一話完結の連作短編という形になる予定です。今後どうなるかは今の所未定ですが、主人公（語り手）が変わったり、語られる時系列が前後することがありますのであらかじめご了承下さい。

耳年増なオンナノコのお話

目が覚めてすぐに、目覚まし時計のアラームを解除した。
「……よし。今日も目覚ましが鳴る前に起きれた」
あたしは大きく伸びをして、ベッドから飛び降りた。
これで、五日連続で早起きに成功だ。
小さな達成感を感じながら制服に着替えようとパジャマのボタンに手をかけたところで、ふいに頭の片隅でぴろりん、と小さな鈴が転がるような音がした。
もしかして……！
あたしは慌てて机の上のスカウターを左耳に装着した。電源をONにすると、ぴぴぴ、と小さな電子音がしていくつかの数字がディスプレイに表示される。
「やった！　早起きスキル上がってる！」
表示切替のボタンを何度か押すと、早起きスキルのアビリティとして”目覚まし時計（ウェイク・アップ）”が使用可能になっていた。
「うふふふ。これで深夜アニメ見放題だわ！　このアビさえあれば、絶対に朝起きられるんだから」
これで、寝坊して遅刻することなんてなくなる。
あたしはうん、とひとつ胸を張って、にこやかな気分でパジャマを脱ぎ捨てた。

全ての生きとし生けるものにレベルという概念があることが世に知られたのは、まだそれほど昔のことじゃない。
アフリカの奥地のある部族に伝統的に伝わってきた儀式が、ある人類学者によって世に公表されたときには、その既存の概念を覆すあまりの内容にほとんど見向きもされなかった。

その儀式というのは、特殊な薬草を使用すると額や手の甲にその人間の格が模様として浮かび上がり、その格が一定以上の者を成人として認めるというようなものだったらしい。

近代に入ってその薬草の成分が科学的に効果があると証明されてから、コンピューターゲームのＲＰＧにちなんで、いわゆるレベルという概念が一般的に広がった。もっともコンピューターゲームとは違って実際に生きている人間のレベルなんか目で見ることはできないので、現代ではスカウターと呼ばれる特殊な機械を使用して自分や他人のレベルを知ることができる。

かつての儀式ではレベルしかわからなかったのに対し、現代の科学によるスカウターという機械は、その人間の持つ技能までもスキルやアビリティという形で表示できるまでになっていた。

あたしの持っているスカウターは、亡くなったひいおばあちゃんから受け継いだ、だいぶ古い型のものなのだけれど、ひいおばあちゃんが得て来たいろいろなアビリティの記録が残っているので、次にどんなアビリティを習得しようかなと迷ったときにいろいろ参考になるので重宝している。

最新型だと一応そういうライブラリなんかも充実してるらしいのだけれど、あくまで一般化されたものでしかないので、世に数千万あるといわれるスキルやアビリティ全てを網羅しているわけではないし、あるスキルを伸ばした結果必ずしもデータ通りにアビリティを得られるとも限らない。遺伝的に特定の家系にしか発現しないスキルというものもあるらしいし、遺伝的に親族のデータの方が信頼できるのだ。

データを最新機種に移植できたらよかったのだろうけれど、さすがに戦時中に作られた機械には現代のものとはほとんど互換性が無かった。もっとも互換性があったとしても、今では顔に片メガネのように装着するタイプのスカウターはほとんどないので、このタイプが気に入っているあたしは新機種に乗り換えようとは思わなかっただろう。

最近では携帯電話と一体化したカードタイプのものが主流で、古いごついタイプの装着型を使用しているあたしは結構めだっているのかもしれない。でも、やっぱりスカウターっていったらこの形だよね、って思うのです。

「ねぇみっちー、聞いて聞いて！　あたし今朝あたらしいアビげっとしたの……よ？」

いつもの待ち合わせ場所に先に来ていた美知子に気がついて、声をかけながらあたしは微妙に違和感を感じて首をかしげた。

なんだろう。昨日までの美知子とは、どこか違うような気がする。

「おはよー、マイ。あんたのことだからどーせ、しょうもないアビなんだろうけど。見せてごらんなさい」

美知子は、小さく笑ってカード型のスカウターの電源を入れた。

美知子から赤外線通信でステータス閲覧の許可を求められたので、許可をしてからもう一度美知子の顔をみつめる。なんだろう、この感じ。何が違うのかははっきりとわからないけれど、昨日までの彼女とはどこか雰囲気が違う。

「目覚まし時計、ねぇ……。こんなの無くたって、朝くらい普通に起きれるんじゃない？」

美知子は、小さく鼻で笑って肩をすくめた。その様子さえ、なんだか役者のように様になっている。

「……ねえ、みっちー。もしかしてあんた、レベルあがった？」

美知子は魅力系のスキルやアビリティを伸ばしていたはず。全体的に底上げされるとしたら、レベルが上がったとしか考えられない。でも……。

「あら、スカウター見ないでもわかるものなのねぇ」

美知子は人差し指を唇にあてて小さく笑った。

「え、みっちー、先週レベルあがったばっかりじゃない？！　いっ

たいどうしてもうレベルあがっちゃったの？」
　あたし達くらいの年齢だと、だいたいレベルと年齢は一致するものなのだ。逆に言うと1レベル上がるのにはだいたい一年くらいかかるのが普通で、先週レベル上がったばかりの美知子が、もう次のレベルになっちゃっただなんて信じられない。
　そんなすごい経験なんて、……あ。
「みっちーあんたまさか！」
「もー、ほんとマイは勘が良くてこまるわね？」
　うわー、うわー、うわー。え、まさか、ほんとにヤってしまわれたのですかみっちーさん？
「……相手だれなの？」
「タカシよ、タ・カ・シ。あいつ俺は三十までドーテーを守り抜いて魔法使いになるんだー！　とか愉快なこと言ってたじゃない？嫌がらせついでに、わたしの経験値になってもらったってわけ」
「あー、そうなんだ。へー、そうなんだ。ふーん……」
　タカシ君……か。
　可哀想に……。あんなのはただの不名誉な称号に過ぎないのに、本気で魔法使いになれるって信じてたみたいだったから、人生の目標を叩き折られた彼はすごいショックを受けたんじゃないだろうか……。
「ねぇ、みっちー。あんたタカシ君のこと好きだったの？」
「え、べつに？　嫌いじゃないけど、特に好きでもないわね。同年代のオトコならどれでもたいしてかわらないんじゃない？」
「うわー。あたしはそういう考え出来ないな。たくさん経験得られるからって、好きでもない人とそんなことって……」
「だって来年は受験じゃない？　ちょっとでもレベル高い方が有利なんだしさー。マイもたぶん、そのうちそんな甘いこといってられなくなるわよ？」
　美知子がそっとあたしのそばに近づいて、耳元に顔を寄せてきた。
「……それとも、わたしとイケナイことしちゃう？　女の子同士で

も意外にいい経験になりそうだし？」
「うにゃー！！」
あたしはあわてて美知子から距離をとった。
「あたし、のーまるだから！」
「あら。ちょっと、残念」
ペロリと舌で唇をなめまわす美知子が、とても怖かった。

結局その日は一日中、美知子とタカシ君のアレな関係に想いを馳せてしまってまったく授業に身が入らなかった。
タカシ君は、今日は一日中頭を抱えて机にうつ伏していた。ときおりすすり泣くような声が聞こえてきて、俺はもう魔法使いになれないかもしれない、と虚ろな瞳でぶつぶつとつぶやいていたのが印象的だった。
ご愁傷様、というかむしろ早くにドーテー捨てられたのなら勝ち組なんじゃとも思ったけれど、彼にとってはとんでもない災厄だったらしい。
彼のステータスを確認したわけではないのだが、本人が望まなかったにせよ、やはり男女間のアレコレというのはものすごい経験だったらしく、タカシ君のレベルも上がっているようだった。
みっちーとタカシ君が具体的にどんなことをしたのかは教えてもらっていないけれど、レベルが上がっちゃうくらいの経験というのは、やっぱりものすごいことをしちゃったんだろう。
アレとか、あんなのとか、もしかしたらXXXなことまでやっちゃったんだろうか。
タカシ君が自分からみっちーに何かしそうには思えないから、やっぱりみっちーからあーんなことやそーんなことをしちゃったんだろうか。
みっちー、どんだけ無理やり迫ったんだろう……。
あたしはそこまでしてレベルは上げたくないなって思ったけれど、

まったく興味が無いことでもないので、どんな状況なら許せるかな、どこまでなら許せるかな、とついつい妄想に耽ってしまっていた。
うわー、うわー、うわー。
思わずピンク色の妄想で頭が埋め尽くされてしまって、顔が真っ赤になった。
ぴろりん、と小さな音がして、妄想スキルが上がった。
称号：耳年増をげっとしてしまった……。

夜、寝る前に”目覚まし時計”のアビを使用して、お布団に入ってからもしばらくは悶々として眠れなかった。
みっちー、大人の階段あがっちゃったのかー。
どんなことしたんだろう……。あんなこととか、そんなこととか、しちゃったのかな。
あたしだったら、アレはできないな。アッチならやってあげてもいいかな、なんて寝返りをうちながら妄想していたら、ふいに頭の片隅でちゃららーちゃーらーちゃっちゃらーとファンファーレが鳴り響いた。
「……え？」
慌てて布団から飛び出て机の上のスカウターを装着する。
電源をＯＮにして確認すると、あたしのレベルが上がっていた。
「妄想でも……けっこー経験値はいるんだ……？」
あたしはひとつ賢くなった。
……っていうかあたしの妄想はレベル上がっちゃうクラスなのか。
うわーはずかしい……。

耳年増なオンナノコのお話（後書き）

■作中における簡単な用語解説

レベル：

簡単に言うとその人の総合的な強さなどを数値で表したものです。

作中においては全ての生きとし生けるものにこのレベルという概念があります。

取得した総経験値が一定の値になることにより、レベルが上昇します。

レベルが上昇することにより、スキルやアビリティに補正がかかる設定です。

このため同じスキル値であってもレベルの高い方が効果が上がります。

アビリティ：

スキルを伸ばすことにより習得できる特殊技能です。

とはいえ、作中におけるものは現実に即しているので

実のところ大して特別でも特殊でもありません。

端的に言うと、「タマゴを片手で割ることが出来る」とかそんな感じです。

ものすごく地味です。基本的に人間が素で出来ることしかできません。

びっくり人間コンテストに出られるようなアビリティは、

よっぽど努力しない限り普通の人間には習得できません。

超能力や魔法のような超常の特殊技能は基本的に存在しませんが、

虫の知らせなど極一部、超常的に思える特殊技能は存在します。

スキル：
技能です。ある技能についてどの程度習熟しているかを数値で表したものを、
作中ではスキル値といいます。
端的に言うと、
英検3級だとか剣道5段みたいなものが目に見えると思ってください。
作中においては経験値はスキルに対して蓄積されます。
蓄積された経験値が一定の値になるとスキル値が上昇し、
アビリティを覚えたりなんらかの称号を得たりします。

スカウター：
その人のレベルやスキル、アビリティを調べるための機械です。
基本的には自分の強さを調べるための機械ですが、
他人の了承を得るとその人のレベルやスキルも調べることが出来ます。
戦闘力たったの5か、ゴミめ……。なんてDBごっこも出来ます。

経験値：
生きていくうえでの全ての経験を数値で表したものです。
ただ生きているだけでも、
日々のなんでもないことで経験は積み重なっていきます。
初めて行う行為には大量の経験を得られます。

称号：
作中においては特に何か効果があるものではありません。
いくつかのスキル値が一定以上の値になった場合や、
所定のアビリティを習得した場合に得られることがあります。

魔法使いになりたいオトコノコのお話

クラスメイトの高橋貴志くんは、ちょっと「お馬鹿」だ。
ただの馬鹿でもカタカナでバカでもなく、「お」をつけて「お馬鹿」なのは、彼が愛すべきお馬鹿さんであるからに他ならない。
あるいは、馬鹿という言葉が良くない響きを与えるというのであれば、馬鹿がつくほど純粋なのだと言ってしまってもいい。
……あれやっぱり馬鹿がくっついてる？
とにかく、小学校の低学年そのままで体だけ大きくなってしまったような、というかちょっと端から見て「大丈夫かこいつ？」と思ってしまうくらいにバカっぽい（ああまたバカって言っちゃった）、人を疑うことを知らない純真な少年なのであった。あたしのクラスメイトは。
その一例をあげると、彼は未だにサンタクロースの存在を信じている、らしい。
……中学二年生にもなって、だ。
そのことを知ったとき、あたしは”両親イイカゲンに正体バラせよっ！”って、思わず見たことも無いタカシ君のご両親に裏拳でツッコミを入れてしまった。この歳になるまでまったく疑われること無く毎年続けられるというのは、賞賛を通り越してその無邪気さが薄ら寒くすらある。
タカシ君もご両親も、大丈夫かほんとに……。
……ちなみにあたしがサンタの正体を知ったのは、小学三年生のとき、親友の美知子に「あんたまだサンタなんか信じてんのー？わらっちゃうー」と盛大にネタバラシされてしまったせいなのだけれど、そのことが無くたってまさか中学二年になるまでサンタを信じるようなことはなかっただろうと思う。……いえ9歳でも遅いとかいう突っ込みは無用ですよ？

その愛すべきお馬鹿さんであるタカシ君とは、今年初めて同じクラスになった。
彼は女子としてもあまり身長の高い方でないあたしよりやや背が低く、くりくりとした両目はいつも何か面白そうなものを探しているようにきょろきょろとしている、なんだか小動物のような男の子だった。オトコノコに対してはあまり褒め言葉にならないとは思うけれど、初めて見たときの感想は「なんかちっちゃくて可愛い」という感じだった。
ところが始業式後のＨＲ、自己紹介の場で教壇に立った彼はその愛くるしい顔ににこやかな笑みを浮かべてこう言ったのだ。
「魔法使いにッ、俺はなるッ！」
びしぃ、っとおそらく彼がかっこいいと自分で思っているであろう奇妙なポーズで、まるで海賊王に俺はなる！と言い放つ麦わら帽子のゴムの人みたいなノリで、そう言い放ったのだった。
まさかこれがウワサの中二病というやつなのだろうか……？
中学二年生になったとたんに発病するなんて、なんて律儀なオトコノコなんだろうと思ったのもつかの間。教室を見回すと、一年生の時に彼と同じクラスだったらしい何人かが、ふうやれやれと肩をすくめるのが見えた。どうやら彼を知っている人たちにはおなじみのセリフであったらしい。
「ほう、高橋は魔法使いになりたいのかー」
担任の矢野先生が苦笑混じりにタカシ君をみつめると、
「はい、せんせー！　ドーテーのまま三十歳こえたら魔法使えるってほんとっスかっ？　せんせ独身だし三十こえてるよな？　なんか魔法使えないんですかっ？」
タカシ君はキラキラとした眼差しで矢野先生をみつめかえした。
あー、なんだこいつは。とあたしが思ったのも一瞬のことで。
「おお、見たいか高橋。んじゃちょっとだけ見せてやろうな！」
どうやらノリがいいらしい矢野先生がそんなことをのたまったの

で、あたしは頭を抱えた。
魔法使いなんて、ネット上で言われているただの不名誉な称号であって、いくらレベルやスキルというものが現実に存在する世の中ではあっても、魔法なんてふざけた技能の存在は今の所確認されていないのだ。

全ての生きとし生けるものにレベルという概念があることが世に知られてから、まだそれほどの年月は経っていない。レベルという概念自体が発見されたのはかなり昔のことであったらしいのだが、その既存の概念を覆すあまりの内容にまったく誰にも相手にされなかったのだ。
とはいえ、昔から「格が違う」という言葉があるように、その道においてそれなりの技量を持つ人同士ではある程度お互いのレベルを見分けることが出来ていたのだろう。
そういった下地があったせいか、レベルというものが存在することが科学的に証明されてからは、意外にすんなりと世間には受け入れられてしまったのだった。
スカウターと呼ばれる機械で定量的にレベル、スキル、アビリティといったものを調べることが出来るようになった現代では、数年置きの国勢調査で全国民のアビリティやスキルなどを調査される。その結果、スキルやアビリティの種類やどれを習得している人が多いかなんていう傾向なんかが発表されるわけなのだが、もちろんそこに魔法使いなんてスキルも載っていなければ、魔法なんてアビリティも載ってはいない。
載ってるのはせいぜい手品スキルくらいだろうと思う。英語だとどっちもＭＡＧＩＣだけどね。
ある意味、魔法や超能力といった超常現象がこの世に存在しないことは、科学で証明されてしまったのであった。
……余談だけど、幽霊が存在することは逆に科学的に証明されち

ゃったらしいよ？

……まあ、そういうわけで。あたしは矢野先生が何をしようがそれは手品の一種でしかないということはじめからわかっていたのだけれど、タカシ君はどうやらそうではなかったらしい。

タカシ君に期待の眼差しで見つめられた先生は、にやりと笑いながら左手をぐっと握り締めて、手の甲を下に向けた。そして握り締めた手をぱっ、と開いた瞬間、先生の手の平から、ぼっ、と一瞬炎が上がった。

「すっげー！！　炎の魔法か？　メラか、ファイアなのか？」

タカシ君が感嘆の声をあげ、教室もざわざわとざわめきだす。

ふう、いい仕事したな、とばかりに額の汗を拭う矢野先生。

「どうだー。俺はオチコボレだからこのくらいしか出来ないけどなー」

うちのクラスで先生のあだ名が矢野・ザ・ウィザードに決定した瞬間であった。

……もっともあたしは先生が左手に隠したライターの頭の部分で、燃えやすい化繊のワタに着火したことは見抜いていたので、それほど驚きはしなかった。

オチコボレと言ってはいたが、手品師としてはそれなりに修行を積んだと見えてその手際はなかなか鮮やかな物だった。矢野・ザ・マジシャンとなら呼んであげてもいいかもしれない。

……なんて思っていたら。

「せんせ、どうやって魔法使いになったんだ？」

「んー、三十歳の誕生日の夜にだな、奇妙な白い獣がやってきて”ボクと契約して魔法使いになってよ！”とか言ってきたんでなー、ちょっとだけ魔法使いやってみた」

先生はおそらく冗談のつもりだったのだろうが、どうやら元ネタを知らなかったらしいタカシ君は、その言葉を鵜呑みにしたらしい。

「すっげー、いいなー。俺もはやく魔法使いになりたいなー！　白い獣こないかなー！」
とおおはしゃぎしたあげくに、クラスのみんなの「やれやれ」という空気に気がつくことなく「お馬鹿」をさらしたのであった。
こうしてタカシ君は、「俺は三十までドーテーを守り抜いて魔法使いになる！」と、ことあるごとに叫ぶようになってしまったのでした。
冗談でやったつもりだったのに、すっかり信じ込んでしまった様子に先生もちょっと困ってしまったようで、ただ苦笑いをするばかり。その後、あたしを含めた教室の皆は、ただ生暖かい目でタカシ君を見守ることに決めたようだった。
……ただ、一人を除いて。

しかし、タカシ君はドーテーって意味わかって叫んでるんだろうか……。
彼のことだから、コウノトリとかキャベツ畑だとかを信じてたとしてもおかしくはなさそうなんだけど……。
ふと彼の方を眺めると、タカシ君は子供向けの魔女っ子モノの魔法のステッキを振り回しながら適当に魔法の呪文らしきものを唱えていた。
……うん、やっぱりお馬鹿。

不器用な現実主義者のオンナノコのお話

あたしの親友、みっちーこと神原美知子（かみはらみちこ）は現実主義者だ。
だから、なのか、それとも単にいじめっ子属性でも持っているからなのか、彼女はどうにもクラスメイトのタカシ君の「お馬鹿」なところが気に入らないらしい。
「馬鹿じゃないのアイツ。魔法使いになんてなれるわけないじゃない！」
タカシ君が「俺は三十までドーテーを守り抜いて魔法使いになる！」と叫ぶたびに美知子はそうつぶやいていたけれど、一応クラスの空気は読むらしく、わざわざ面と向かってタカシ君に言ったりすることは無かった。
「みっちー、タカシ君に興味津々？」
あたしがにやにやしながら尋ねると、いつものように美知子は肩をすくめてかぶりをふった。
「あんたも馬鹿なんじゃないの？　何でも色恋に結びつけるなんて」
「恋に興味がない方がおかしいと思う。十代なんてあっという間だよ？　命短し恋せよ乙女ってゆーじゃない？」
だいたいみっちーは美容と健康にお金と手間隙かけてステキなスタイルを維持している上に、ファッションにも気を使っていつもオシャレな格好をしているくせに、なぜかあんまり色恋沙汰に興味がなさげなところが変だ。
「恋なんてただの勘違いでしょう？　恋人同士だなんて互いに互いを勘違いするから成り立つだけの関係じゃない」
うっわー。みっちー言い切っちゃったよ。
「じゃ、みっちーはなんでオシャレしてるの？」
「女に生まれた以上、美しくあろうとするのは当然でしょう？　別に男引っ掛けるためにお金と手間暇かけてるわけじゃないわよ……？」

「ふーん」
口では興味なさげな割りに、なんだか少し頬を染めたりして乙女っぽい仕草をするところを見ると、本心ではオトコノコに興味ありと見た！
「で、はぐらかされちゃった気がするけれど、結局のところタカシ君のことどうなの？」
ニヤニヤと笑いながら問いかけたら、美知子は深くため息をついた。
「……中身が、アレじゃなきゃね」
「……ああ、うん。確かに」
言動はどうあれ、実際タカシ君は見た目だけはかわいいのだ。オトコノコにカワイイが褒め言葉になるとは思わないけれど。ときどき無性に彼に女子の制服を着させてもふもふしたくなる衝動にかられるのはあたしだけではないはず！　……え、あ、あたしだけの特殊な性癖じゃないよね？
「それにやっぱり、現実的じゃないわ。魔法使いになりたいだなんて……」
美知子がもう一度深くため息を吐いた。
「あたしは、夢を追いかける人はかっこいいと思うけどなー？　流石に魔法使いはアレだけど」
レベルやスキルが現実に存在するとはいえ、流石に魔法だなんて存在しないものを追いかけるのはちょっとどうかなって思う。

全ての生きとし生けるものにレベルという概念があることが世に知られてから、まだそれほどの年月は経っていない。とはいえ、科学的にその概念が現実に存在することが確認されてからその研究はかなり進んでいる。
真っ先に否定されたのは、超能力や魔法といった特異な能力の存

在だった。自称超能力者や、魔法使いといった人達は、その能力にあたるスキルやアビリティを保持していなかったのだ。その代わりに詐術だったり手品だったりのスキルが高いことが判明して、そういう特異な能力は存在しないということになってしまった。

タカシ君いわく、「今の世の中で確認されていないからって、無いから無いなんて証明できるわけ無いじゃん」だそうで。お馬鹿はお馬鹿なりに賢いというか、たしかに「無い」ことを証明するのは難しい。悪魔の証明ってやつだ。

でもだからって、世界中でまだその存在が確認されていない「魔法」なんてものを目指すのは、やっぱりちょっと現実的じゃないと思うのです。

「だいたいね……」

美知子がちらりとタカシ君の方を見ながらつぶやいた。

「タカシのやつは、なりたいなりたいって叫ぶだけで、なるための努力をまったくしようとしないじゃない。わたし、そういうところがだいっきらいなの！」

「あー、たしかに。矢野センセが魔法だーって手品見せたときも、先生に魔法を教えてくれとは一言も言わなかったしね、タカシ君」

「そうよ。わたしがどれだけ努力して、それでもなお届かなくてあきらめたと思ってるのっ！」

美知子がどん、とあたしの机を拳でたたいた。

「へ？」

みっちーが綺麗になるための努力をしているのは知っているし、実際その効果も出ているのに何をあきらめたって言うんだろう？

瞬きをして美知子を見つめると、口元を左手で押さえていた。いかにも失言した、って感じ。

「いえ、なんでもないわ」

ぶるんぶるんと首を左右に振って、ごまかすように美知子は笑った。
「でも、そうね、ちょっとイイコト思いついたわ」
「……みっちー、なんかオーラが黒いよ？」
「あいつに現実ってものを教えてあげるのも、いいかもしれないわね？」
くすくす笑う美知子が、ちょっと怖かった。

……この数日後、タカシ君はみっちーに襲われてドーテーを奪われることになった、らしい。
流石にちょっと聞くわけにはいかず、具体的に何をしたのかは知らないけれど、タカシ君とみっちーの二人ともがレベル上がっちゃうような経験をしちゃったことだけは確かだった。

「これで、タカシも現実を見ようって気になったんじゃないかしら？」
つやつやとした笑顔で、美知子が笑う。
「……あー、タカシ君、自殺しかねないくらいに落ち込んでるっぽいケド？」
あたしのつぶやきに、美知子は笑顔で答えた。
「だったら、死ねばいいのよ」
うわー。流石にそれはひどくないかい、みっちーさん？
「夢破れて、それでも夢を追い求めるようなら。そのときは……惚れてあげてもいいわね」
美知子はそう言って、まだ机にうつ伏したままぶつぶつつぶやいているタカシ君の方を見つめた。なんだかその横顔は、とても優しかった。
「……なんだ、タカシ君のこと結局好きだったんだ？」

恋愛感情の無い体だけの関係ならひいちゃうところだったけれど、美知子がタカシ君に惚れているのなら応援するのにやぶさかじゃない。それとも、身体をかさねたら心まで魅かれちゃったというやつなのでしょうか？

「ばーか、そんなんじゃないわよ。今はまだ、ね」

微笑む美知子を見ながら、あたしはみっちーって不器用、と心の中でつぶやいた。

不器用な現実主義者のオンナノコのお話（後書き）

今の所、あと2話分お話のネタがありますが、次の更新は未定です。
次は「素敵に無敵なオンナノコのお話」のつもりですが、
オンナノコ→オトコノコ→オンナノコで来てるので、男の子を先にするかもしれません。

ネタバレとか裏設定とかお嫌いな方は、以下の後書きは読み飛ばしてください。

タカシ君とみっちーさんは、設定上本番は行っておりませんが、普通に書くとやっぱり十八禁な感じになってしまうので、たぶん具体的に何があったのか今後（書いたとしても）ここで発表することは無いと思います。
なので短く書いてしまうと。
”みっちーさんがタカシ君のお尻の処女を奪った”
という感じです。
みっちーさんはその昔、魔法少女を本気で目指していて、いろいろ努力をした末に叶わないのだとあきらめています。「なりたい！」というだけで全然努力しようとしないタカシ君のことが、ひじょーに腹立たしかったので、コトに及んだわけですね。彼の信じる手段を叩き潰してやったら、ちょっとは現実見るんじゃないかと。
いろんな意味でタカシ君にはトラウマものの経験だったわけですが、彼が立ち直れるかは未定！

笑顔がステキな頼りになるオトコノコのお話

あたしのクラスの学級委員長、委員長くんこと榊俊夫（さかきとしお）くんはよく気が付く人だ。誰かが困っているとすぐにそれを察して助けに入ってくれる、委員長おぶざ委員長っ！って感じのいい人だ。悩み事があれば真摯に相談に乗ってくれるし、クラスの中で何か不満や問題があるようなら直ちに改善する方向で率先して頑張ってくれる。

とはいえ、彼の基本的なスタンスは「手助けするけど解決は自分でするべき」というモノであるらしく、自分の力で問題を解決しようとしない人に対してはけっこー冷たかったりする。

先日あたしが数学の宿題を忘れたときに「いいんちょーくんなんとかして？」ってかわゆく微笑んだら、彼は爽やかな笑みで「宿題は自分でやるべきだよ？」ってわざわざ手作りのヒント集をあたしにくれた。それは教科書のどのページに解き方が書いてあるかを記した物で、直接ノートを写させてくれたりはせずに、わざわざ手間をかけてそんなものを用意してくれる所が委員長くんらしかった。

見た目はけっこー普通でそれほど人目を引く容姿というわけでもないのだけれど、内面からにじみ出るかっこよさというのか、うちのクラスの女子には密かに人気がある方だ。

……そんな彼なのだけれど、なぜか特定の親しい友人を作らないことで有名だったりする。

そもそもの発端。榊くんが親しい友人を作らない、というウワサの元になったのは、とある出来事が原因だった。

「ねえ、誰か、いいんちょーくんのレベルいくつか知らない？　あと、彼ってどんなスキル上げてるのかな？」

笑顔が素敵な頼りになる委員長のウワサを聞きつけて、他のクラスからやって来たミーハーな女子がうちのクラスの女子に問いかけたこの一言に、クラスの誰一人として答えることが出来なかったのだ。

この世には、レベルとスキルという概念が見に見える形で存在する。

自分のレベルやスキルというのは、かなりプライベートな情報だ。特にスキルには、これまでその人が何をして来たのかが如実に表れる。あんまり大きな声では言えないけれど、たとえばあたしなんかは妄想スキルがけっこー高かったりして、そういうのがオトコノコにばれたりしたら「えっちな女」だと思われかねない。だから基本的にはレベルやスキルといったものはあまり気軽に他人に教えるような情報じゃないのだ。

とはいえ親しい友人間では、自分のレベルやスキルなどをある程度お互いに見せ合うのが普通で、逆に言うと相手のそれを知らない、自分のそれを相手に知らせないということは、それほど親しくないということにつながる。

ようするに誰も榊くんのレベルやスキルを知らないということは、彼と親しい人間がクラスには一人もいないということを意味するのだった。

隣のクラスの女子襲来事件があってから、当然うちのクラスでは「彼のレベルやスキル」が話題になった。あたしたちの年代だとだいたいレベルというのは年齢と同じになる。中学二年生なので当然レベルは十三から十四くらいなのだろうと予想はできるものの、どういうスキルを伸ばしているのかは誰も知らなかった。

例えば特定のスポーツに秀でていたりとか、特定の教科が得意だったり苦手だったり、その程度のことからでもだいたいどういうスキルを伸ばしてるのかは想像がつくものなのだけれど、困ったことに榊くんはスポーツも勉強も割合よく出来るし、何をやらせても標準以上にそつなくこなすので、どういった方向にスキルを伸ばして

いるのかがまったく想像がつかなかった。
直接尋ねたら案外気軽に教えてくれたのかもしれないけれど、レベルくらいならともかくスキルを尋ねるというのはある意味で「あんたの性癖教えて？」と言っているのに等しいわけで。
奥ゆかしいオンナノコとしては、オトコノコにそういうことを気軽に尋ねるわけにはいかなかったりしたのだった。
……そこ、どこが奥ゆかしいんだ、とか首を傾げないように！
でまぁ女子連中で、なんか聞きづらいよね、あんた聞いてきなさいよ、えーやだー、なんてこそこそ話をしていたら、あたしの親友、みっちーこと美知子がひとつため息を吐いて言った。
「そんなの直接聞きに行けばいいじゃない」
「うー、そう言うけどさ、ちょっと直接は聞きにくいじゃない。みっちーだって、そういうこと男子に聞かれたくないでしょう？」
あたしがちいさく口をとがらせると、美知子はにやりと微笑んだ。
「あらー。わたしはマイと違って、他人に知られて恥ずかしいようなスキルは高くないわよ？」
「みっちー声が大きい！」
あわてて美知子の口をふさごうとしたら、彼女はあたしに向かって小さく目配せした。
え、もしかして今の、わざとまわりに聞こえるように言ったの？
榊くんの方を見ると、彼も美知子のセリフが聞こえていたらしくこちらを向いていた。
美知子は小さく微笑んで榊君に声をかけた。
「ねえ、委員長。今自分が話題になってるって自覚あるんでしょう？　他人に知られて恥ずかしいスキルがあるんじゃなかったら、大人しくみんなに公開しない？」
言いながら、美知子はスカウターの電源を入れて榊くんの方に向けた。どうやらステータス閲覧の許可を求めたようだった。
美知子の問いかけに、クラス中の視線が榊くんに集まった。榊くんはちょっと困ったように微笑んで、ただ「ごめん」とだけ言った。

「……そう。つまり、他人に知られると恥ずかしいスキルが高いわけね？」
意地悪な笑みを浮かべる美知子に、榊くんは爽やかな笑みを返した。
「そう思われても仕方が無いね。好きに想像してくれていいよ」
そう返されては、何も言えないみっちーであった。
「……無理に聞こうとして、ごめんなさい」
美知子が素直に謝って、その話題はここまでという感じに収まってしまった。

とはいうものの、裏では女子連中にかぎらず男子までまきこんでいろいろなウワサが出回るようになっていた。
「いいんちょって、何やってもすごいしさ、実はすっごくレベル高いのを隠したくて誰にも秘密にしてるんじゃない？」
「ありそう。えーでも高いのが恥ずかしいってどゆこと？」
「そ・れ・は。アッチの方とか？」
「アッチ？」
「ほら、男女のアレコレってすっごく経験値はいるってウワサじゃない？」
「えー、もしかして、委員長くん裏で女の子とっかえひっかえしてるとかー？」
「んー、どうかなー。委員長くんだし。親しくなりたい女の子はいっぱいいると思うけど、彼ってお付き合いするなら、真剣につきあってくれそうだし？」
「そうだねー」
とまあそんな感じで、「委員長君は女子大生のカノジョがいて日頃からイロイロなことをしてるせいで、同年代と比べてレベルが飛びぬけてるからナイショにしているに違いない」だとか、「イヤじつはかなりディープなオタク趣味があってそれがばれるのが恥ずか

しいんじゃないか」などなど思春期特有のとんでもない憶測が囁かれていたのだった。
しかしクラスで一番ずけずけと物を言う美知子が尋ねて答えてくれなかったものだから、改めて本人に確かめようとするものは誰もいなかったのだが……。
あたしは、ひょんなことから委員長くんの事情を知ることになってしまったのだ。

笑顔がステキな頼りになるオトコノコのお話（後書き）

オチらしいオチもなく前フリだけで終わってしまってごめんなさい。
基本は各話完結のつもりだったのですがうまくまとまりませんでした。
委員長くんの事情は「汗と努力のオトコノコのお話」に続きます。
全部続けて書くとちょっと長くなりそうなので分けることにしました。
委員長くんと「素敵に無敵なオンナノコのお話」で出てくる予定の悠里さんの二人はもともと長編書くつもりで練っていたネタなのでなかなかきりが良い所で文章が終わりません……。
次が「汗と努力～」と「素敵に無敵～」のどっちが先になるかはいまのところ未定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0821ba/

あーるぴぃじぃ

2012年1月10日00時46分発行